

「不安感」を究明するために……

私は大学を卒業後も心理学を勉強しています。それはごく一般的な社会生活の中で学ぶことと、もう一つは、その当時に取ってひも解いてみても理解できなかったり、自分とは縁が遠いように思えた教科書のたまたま開いた一ページが、30歳なら30歳の時の私の、どこか琴線に触れるところがある。それをきっかけに再び古い教科書を読み返す楽しみを得ることができました。

大学では、4年間で終わるための学問に接しているわけではありません。これから先、長い人生において、いろんな場で皆さんが学ばれることは必ず生きてまいります。ですから古い教科書も古いノートも、虎の巻のようなものも含めて、すべからずお残しになっておくことをお勧めします。それも段ボールにしまい、上からガムテープを貼り、上には夏場は使わないこたつなどを置いておくというようないい方ではなく、本棚の一部分に心理学のコーナーを作り、普段はにらみつけるだけで年に一度だけほこりを払

レクチャー

心の探検

茶道裏千家家元
千 宗室



うようなものだと、必ず皆さんの方の役に立つ日がやってくるということを、私は52年間の人生で確信することの一つとしてお話し申し上げておきます。さて、ここにいらつしやる皆さんたちは、それぞれがいろいろな形で心理学に興味を持っておられます。「心理学」というように、後ろに「理学」という重たい響きの言葉が付かない、プレーンな状態での心理学というものは、すなわち心の問題というものに皆さんは興味をお持ちになったから、この学問を学ぼうという気におなりになったのではないのでしょうか。私の場合も実はそうです。心理学を選ぶ動機となったものは、子どものころからずっと持ち続けていた名状しがたき不安感が、その元でございます。

常に私は不安感というものを道連れに少年期、青年期を過ごしてまいりました。非常に特殊な家に生まれたと同時に、周りからも二重、三重に色眼鏡をかけて見られるような中で育ってまいりました。小学校や中学校の時は、心ない先生や保護者の方から、よくいろいろな形で揶揄されたこともありました。世襲制の家だということで、就職する必要はないから

いいな、などということ、先生からも言われました。また同級生からは、常にそういうことでいじめも受けてたりしました。今と違って昔はいじめの問題などについて、いじめられている本人もあまり表沙汰にはしません。ですから、いじめの相手と取っ組み合いの喧嘩や殴り合いなどもやってまいりました。そんな中で、時によってどうしても粗暴になったり陰鬱になったりする自分の、心の揺れ動き方の元になるものは何かと考えた時に、それがどうとも原因を特定しづらい不安であるということに気がつき、同志社大学で心理学を専攻したのです。

安心感と不安感を交互に与える自然

今はちょうど紅葉が遠くの色鮮やかに覆っております。秋の紅葉、それから春の満開の桜を見ると、私たちは常に心がやすらぐというか、安心感があるというか、俗な言い方をすれば、ほっとする。そういう心地になります。ほっとするか。自然が移ろう時の姿、華やかなものから侘しく哀しいもので、いろいろな形で自然は私たちの前にありのままの姿をさらけ出します。春の桜が私たちの心

にどこことなく安心感を与えてくれるのは、その一輪一輪が開花することによって、冬が遠ざかっていくことを確実に示してくれるからです。

紅葉にも心やすらぎますが、紅葉の方がなぜ寂しげに感じるかというのは、紅葉が散ってしまった後は何もなくなるからです。それが不安感をもたらす。不安を感じるからこそ余計に、その色鮮やかな紅葉に対してがみつきたいような、それでいてはかなさを感じるような、えもいわれぬ情感が出てくるわけです。庭先の梅一輪でもいい。前日も今日も気温は同じ、庭に差し込んでくる春か冬か分らない、頼りない日差しも同じ。渡る風も同じように冷たくとも、その目の前にあるひと枝が裸であるのと、梅のつぼみはつきりと見えるのとでは、確実にそれを眺める人の心に対して与える印象は変わってまいります。

季節が移ろうことは私たちに對して安心感を与え、それと同時に、たくさんの方の安心感を与える見返りとして、今度はたくさんの方の不安感も与えてくれるわけです。桜が終わる、山々がそれまでの緑をどす黒いほどの、ぎとぎととして脂ぎつ

た、新緑という言葉はどこかに置き忘れてしまったかのように濃い緑に覆われている先には、必ず梅雨がやってくる。雨があると思うからこそ、私たちは新緑の時期の方に心が騒ぐ。新緑がふてぶてしさを増すに加えて、どこことなく気持ちの振れ幅が大きくなっていく。パーターではありませんが、安心感と不安感というのはそのように、てれこてれこにやってくるものです。

ストレスとその解消法

シュレジンガーという学者が言った「不安は現代公認の情動である」という言葉を、今朝ほど思い起こしていました。不安感というものは、自分が何かに怯えている、怖いものがあるということ、声を大にして言えない時代というのは、やはりあったわけです。臆病であるとか情緒不安定であるとか、自信がないとか、そういう悩みを持っていることを口に出すのは自分のマイナス要因になってしまうわけですね。不安というのはさまざまな概念と結びつくものですが、ただ、今の世の中、不安という非常に漠然とした大きな存在、概念に対して、もっと小さな

ものがいろいろと結び付いています。

よく使われるのに「ストレス」というのがありますね。ストレスは、与えられる場合もあれば、与える場合もあります。実験などでは負荷していくこともあります。ストレスという言葉は元は物理学の世界にあつたというふうに聞いた記憶があります。そして、それを心理学と医学の世界が借り受けることから始まった。同様に、物理学の方からやってきた言葉の中には「緊張」というのもありましたね。

物理学で言うところのストレスとは、一つの構造体ないしは一つの系に働きかける力です。ある程度は耐えられますが、ある強さを超えてそれが増大してしまうと、その構造や系列に対して大きな歪みが出てくる。それが本来、物理学で使われておりましたストレスという言葉の意味です。ですから、よくストレスを中心に精神的に何か大きなダメージを受けるとするのは、本人の状態に非常に歪みが出る、負荷に耐え切れないということになるのです。それゆえ、不安とストレスという二つを考えると、私は不安という方が大きな母屋のようなもので、ストレスはその中にある小間のようなもので

はないかという受け取り方をした記憶があります。エイケンという学者は、不安というのは、異なった体にあるけれども見た感じは非常に似ているものだというふうに喝破しておりました。

ストレスから逃げるために私たちはいろんなことをします。憂さを晴らす。例えばタバコを吸う。そこに対しての刺激でストレスを晴らす。食べることもガムを噛むのもそうです。ほかには、アルコールを摂取する。上役の悪口を言いながらお酒を飲む。私もお酒は結構好きです。で、お酒を飲んで解放される時、自分の中にたまっているものを出していく時というのは、非常に効果的なような気がする。これが怖い。最近では、同志社大学でも大麻のこととかいろいろあって大変なことだと思っています。いま私が関わっている大学でも必死に撲滅キャンペーンをやっていますが、やはりこれは個人のモラルの問題だと思います。そういうものに逃げるのは、ストレスを晴らすしているようで、逆に罪悪感を余計に呼んでいるのだとするならば、決してこれはスト

レスを晴らすことにはなりません。胸に覚えのある方は、どうぞそういうものに出さないように。人生を踏み誤りませんようにお願いいたします。

寝ること、議論をすることもストレスを晴らすといえます。それから、これは私が時々やっているらしくて家族に指摘されますが、独り言。独り言ちるというのもまた、ストレスを解消する。ダムで言えば、たまってきた水を放水するようなものかもしれません。あとは、無意味な活動をする。うろろろする、むやみにうろろろするを掻く。組んでいる親指同士をくるくる回したりとか。そういう無意味な行動はストレスを晴らす習慣とも言えます。空想や白日夢の世界へ逃げていってしまうというのがあります。

白日夢の世界にこもる 街のイヤホンユーザー

東京でこの夏、不気味な光景に出くわしました。昼間、有楽町のスクランブル交差点でたまにま立っていた時のことです。私の前方で信号待ちをしている人たちを見ていると、大勢がイヤホンをつけている。最近ではアイポッドなどいろいろ

ありますから、イヤホンについてはそれほど気にしませんでした。しかしイヤホン軍団がそれだけいると、あまりの占有度にびつくりしました。青になると、それが一度にどーっと来る。私も歩いていました。だんだん怖くなった。

みんな目が虚ろなんです。何を見ているか分からない。目は開いているが、焦点が合っていない。ジョージ・ロメロの映画「ゾンビ」の方がまだ、目に迫力がありました。まばたきもあまりしない。ぼーっとして、いわゆる半眼状態です。広隆寺の弥勒菩薩にたとえたと怒られるかもしれないが、そういう状態ではほとんど流されてくるように歩いてくる。そして、風に吹かれた落ち葉が木の幹に当たりそうになりながら、ふっと避けるような感じで私を避けて後ろに消えていく。びつくりして非常に気になったものから、交差点を渡ってから今度は反対側を向いて、次に来る人たちを見てみたら、やはり同じように虚ろにやってくる。

世の中の音を聞きたくないのかと最初は思いました。自分の家から外に出るということは、世の中に触れるということ。音に触れるということ。自分の

見たくないものも見なければいけないし、聞きたくないものも聞かなければいけない、触れたくないものにも触れなければいけない。耳を塞いで自分でしゃべってみると、私の声は自分の心の中に響きます。自分だけの世界です。個室から出て、世の中に足を踏み出しているのに、彼や彼女らは皆、個室を背負って外に出てきている。個室のまま移動している。かたつむりか、やどかりのような人たちが増えてきています。それは現実の世界にいないのと同じ。言ってみたら、空想だとか白日夢の世界に自分を置いている、すなわちストレスに対する防衛規制の一つの手段を、ストレス状態にないのにもかかわらず継続していることに他ならないのです。

抗生物質を飲みすぎると効かなくなると言いますね。痛み止めも同様です。それと同じように、本当にストレス状態になった時に、それから脱出する術を持つていてそれを為すのならば充分な作用はあるのかもしれないけれど、もし常日頃からストレスが与えられない状態ないしは常にストレスをはねのけている状態にしているのならば、どうなるでしょう。

非常に抵抗力の弱い人間ができあがってしまうということ。

アナログ的な「心」なるものを 現代こそ追究する意味がある

心理学というのは、常に何かを断定できる学問ではありません。心理学が医学の分野に入っていない理由はそこにあるのかもしれない。というのは、心理学というのは、ここに4000人の方がおられるとするなら、4000人の心は4000通り。まったく同じDNA配列がないのと同じようなものです。それが、目に見えない心という媒体の話なわけですから、余計に何とも判断しようがない。心というのは、写真にたとえるならアナログです。今はたいがいカメラがデジタルですが、私はいまだに35ミリの一眼レフに、レンズをあれこれ換えて撮っています。デジタル写真とフィルム写真の違いはいったいどこにあるのか。

通常のフィルムで撮った風景写真を拡大してみましよう。どこかの里山の風景。向こうに小山があり、柿の木などがあつて水車が回っている。その写真の一部に、見ている時には小さな点、しみか汚れに

しか思えなかったところがあつたとしましよう。ところがそれをどんどん拡大していくと、その、ちょっとした汚れのように見えたものが、実はカラスだったり寝そべっている犬だったり、おそらく少なくとも汚れてはなく何らかの生命体であるのが分かることがあります。アナログは拡大すれば、必ずその物が見えてきます。デジタルはどうでしょう。私の顔を撮った写真をどんどん拡大していくと、どうなります。最後はドットの集まりです。皮膚感が出るとかそういうものではなくて、ドットの集まりになつてしまふ。皆さん方もデジタルで撮られたら、ドットの集まりなんです。

心は、ドットの集まりではないですね。心はアナログです。拡大すれば、上下左右均等のドットであることはあり得ないと思う。だからこそ人間は紀元前から心というものがどういふものなのか、苦心惨憺、頭をひねくり回して考えてきた。昔は人間が見たり聞いたり考えたりすることは、魂、ソウルの働きだと思われてきました。魂は肉体とは別のものであり、人間が生きている間は肉体にあるけれども、死んでしまつたら出ていくと思われ

ていました。魂はどこに宿っていると考えられたか。一番最初、魂は心臓にあると思われていました。単純な理由です。生きている間は動いている、心音が聞こえる、でも死んだら止まる。その次は、なぜか肝臓です。3番目が脳髓。ヒポクラテスなどがこういう説を唱えたとき聞きました。脳髓の時代が結構長く、紀元前からガレノスの時代、つまり紀元後まで、いわゆるギリシア文明時代からローマ文明時代まで、脳髓に魂が宿っているという説が一般とされていました。そして長い中世の暗黒時代を経て18世紀終盤に、ようやく大脳皮質のあちこちにあるという説をガルという人が唱えたのです。昔の学者は愉快でいいですね。せっかくここまでやっておいて、この人は骨相学の方に行つてしまつた。いわゆる人相見みたいな方に行つてしまつた。こういう楽しい学者がもうちよつといると、世の中がもつと明るくなると思つたりする時もあります。

けられてきた。それだけ近年まで心理学は捉えどころのない、どこに据えていいのか分からない学問だったのです。

「欲求のヒエラルキー」の
バランス欠如がもたらしたもの

最近新聞を読んでいると、怖い事件が多いです。この間の元厚生次官に対する殺傷事件にしても、いろいろと原因が分からない。こういう時代こそ心理学者の出番ではないかと思うことがございます。マスローという学者は「欲求のヒエラルキー」を確立しました。ピラミッド型に欲求を積み重ねていきました。一番最初の欲求は何だったか。根源的な欲求は、生きるといふことに直結するものです。呼吸をする、眠る。食べるとか性欲であるとか、そういうようなことが一次的な欲求です。それを経た二次的欲求というのが、初めて個人から人に対してのものに切り替わつていったことを授業で学ばれた方もおられるはずですが。腹が満ちたから、寝たから、次はどうするか。これが、自分の身を守りたいという安全欲求です。それと同時に所属と愛情の欲求が出てきます。所属の欲求とは、自分一

人ではなくどこかに群れたい、所属したいというもの。そして、愛したり愛されたりという欲求。それを経た後に、どんなピラミッドを上がっていくと、今度は承認や尊敬の欲求になります。他人から自分を認めてもらいたい、尊敬してもらいたい。欲求の段階は、最後は自己実現の欲求という、いわゆる芸術、文化、教育に携わる欲求まで行くわけです。

最近の事件を見ると、所属や愛情の欲求、また承認や尊敬に対する欲求というものを短絡的に求める人たちがいる、ないしはそこでのヒエラルキーが狂つてきているのかなという気もいたします。私は病理学的なこと何もお話できません。ただただ、感じたことしかお話しできませんが、やはりそういうところでマスローが提示してきたヒエラルキー・ピラミッドが不安定なものになつてきているか、またそれを一個人として組み替えて持つてしまうような環境で育つてきた人が出てきている可能性がないとは言えないと思います。

自己承認や、私を愛してほしいなど、自分に対して手を伸ばすことを求める気持ちを持つのは誰でも当たり前と思いま

すが、そのために必要なことを知らない人が多いのではないのでしょうか。自分が人を好きになることをしないで、私を好きになつてくれというところがバランスを欠いているのでしょうか。自分を認めてほしい、理解してほしいと言ふのならば、相手を認める、理解する、相手を認めようと努力する、理解しようと努力する。そういう人間の基本的なマナーを知らないで、ひたすら一次的な欲求、個人的な欲求だけを先走らせてしまうから、余計にストレスがたまつてくる。ストレスというものは、それを上手にコントロールすることさえできれば、ある意味、刺激として自分自身を成長させることが可能になるものです。ところがそうしないで、無菌状態で育てられたか、世の中のことに無関心でも生活できる社会ができてつあるからか。どうも、そういう意味でのガードが甘い人たちが垣間見えてなりません。

心理学の断片的知識に頼る危険性

アメリカのとある新しい小説を読んでいる、気になったことがあります。「私たちはお互いに心理学用語に精通し

ているようですね」という会話です。学者ではなく、片方は探偵で片方はテロリストです。「心理学用語に精通している」というのは、果たしてそれは心理学の何を語っているのでしょうか。心の、何について語っているのでしょうか。心理学の辞典に出てくるようなものを丸覚えしていれば言える会話を交わしても、それが実際に自分の中で体験を通じて身についたものでなくては根無し草であるのは間違いないし、同時に、本から拾ってきた心理学の知識などで自己分析などをしていても正しい分析になるかどうかということ、誰が考えてみても答えは一目瞭然ではありません。

私は非常に狭い意味で「心理学を学ばない人が心理学を語ってはいけない」と言っているわけではありません。これは諸刃の剣だと申しあげているわけです。私はよその大学の授業も含めて、心理学の話はこの15年間しておりません。自分が学んでいた教科書がもう古いのは分かっていますし、フロイトやユングが壁に掛けられた肖像画のような状態になつているのもよくわかつております。学んだ後も定期的に好きな本を読んでいるとは

いえ、古い心理学の本を読み返しているだけの私が何かを語ってしまつて、それを通じて人を分析しようとしていたり自分を分析しようとしていたりすると、やはりこれは無理が出てくる。知識とは、それを自分の身につける術をなくして持っているだけでは、ただ箱に入れて本棚に飾っている世界文学全集と同じようなものです。開いていなければ読後感が生まれません。手垢がついていないと記憶に残らない。

小説を読んでいると、クレッチマーの体型に触れての一節なども出ていました。あなたは太っているから躁鬱質だね、などという話です。しかしそんなふうにしてあつたら、またそこだけ読んだ人がいたとしたら、そう思うではありませんか。この間インターネットを見ていたら、ブログか何かで、私は躁鬱質から脱却するために肥満体型をやめると書いてあつた。それなら太っていたら全員躁鬱か、ということですね。違いますね。体型などで判断はできない。クレッチマーは自分の被験者を相手にした中で、一つの実験結果として説を出しただけのことです。インターネットなどの普及により、

本で読んだりどこかで拾ってきたりした知識を簡単に披露できる場が増えていくことにも、問題の一つがあるような気がしてなりません。

常につきまとう

「影」を気にするより 「二期一会」の心を大切に生きる

私は自分の不安感と上手に付き合つてまいりました。大学4年間の勉強で、とりたてて不安感を専門にやつたわけではありません。私は卒業論文で触覚ということをやりましたが、触覚を通じての不快を実験しました。その中で、不安感というものについても、自分の空いた時間で、大学を卒業した後も少しずつ調べながら、ようやく分かつてきたことがあります。10年ほど前にとりあえず見えた一つの結論は、不安感というのは私にとつての「影」であるということです。人間にしても何にしても、固体である以上、影が映ります。影は切つても切れないもの。私にとつての不安感は影なんだと考えました。

晴れた日ははっきり見える。じゃあ雨の日は見えないじゃないか、夜は見えない

いじゃないかと言われても、見えないだけで、そこにあるのです。見えなくても、影はいつでもすぐ戻つてこられる状態にある。常にあるのならば、影を消そうと思わないで、影を気にせず影と一緒にいることを当たり前のように思えばいいのではないか。こういう仕事をしていると、いくつになつても、いろんな形で色眼鏡をかけて見られることが多いです。何をしても言われます。いろんな騒動にも巻き込まれます。そういう中で影を消そうと思ったら、自分を消さないといけなくなる。それはいやです。自分で自分の命を絶つ気はありません。いやでも応でも、影は必ず自分にくついついていんだという気持ちでいようと思つてから、私は少しだけ強くなれたような気がしています。

私たちは毎日、新しい一日に出合います。少なくとも明日の朝起きて命があれば、新しい一日に出合う。それは未知のものに出合うことです。未知のものと出合うということは、不安感がまた増えるということですね。新たな不安の種、心配の種が出てくる。でもそれを嫌がついては、自分を消すしか方法はなくなつて

しまふ。新しい一日に出合うとは、不安と出合うのではなくて、知らないことを学ぶチャンスを与えてもらったのだと思えるようになってきました。

最近では世の中に嫌気がさしている人もたくさんいると聞きます。世の中のあるところを探していると、余計にいやになるでしょう。なぜ世の中に対して不平や不満が先に立つ人たちがいるか。人生に退屈している彼ら彼女らは、その人生の楽しみというものを誰か他の人が与えてくれるというふうに、誤った認識を持っているからではないでしょうか。喜びというものは自分から探さないといけない。それは自分の責任です。疑問というものも、まず最初に自分から答えを見つけていこうとしないといけない。それも自分の責任です。やってみて、どうしても難しければ、その時に誰かに頼ればいい。最初から誰かから答えが与えられるのを待っているのは、何に対しても不平、不満が先に出るばかりです。

もしそういう思いでしたら、せっかく出合った一日に対して、また、ようやくありがたいことに与えられた新しい一日に対して、非常にあつさりとした、いい

加減な、斜に構えた対応しかできなくなっています。目の前を通り過ぎていく一日に対して、しまつたと思ひ、目をそむけず手を伸ばそうとしても、もう掴まえられる。手は、届きません。いつも私は自分に言い聞かせています。人生はリセットがきかない。人生にはリハールは無い。毎日毎日が本番なんです。

毎日が本番だという思いを持つこと。良い日も悪い日も、好きな日も嫌いな日も、毎日が本番だと思えば、実はそれが私の生涯を通じて学んでいく、この茶道という伝統文化の根幹にある「二期一会」の精神に直結していると思うのです。人生にはリハールがないという思いこそ一期一会であり、同時にそれを持つことが、自分の心の暗部である不安を照らす一灯になると思つていけるのです。

私は大学を出た後、寺で修行させていただきました。禅の世界で言われる「悟り」とは、外に対して答えを求めめるのではなく、自分の心の中に戻っていくことを指します。いかに素直に自分が自分の心を色眼鏡を外して見られるか。素直な気持ちで自分の心を見られるか。それが悟りというものだと思つています。

心という複雑怪奇なものに立ち向かつてこられた先輩方、また、同期の人たち、後輩の皆さん、非常に恵まれた環境の同志社大学心理学科で、これからは学部として学ばれる特に現役の皆さん方は、そういうような非常に奥行きのある深い場におられるのだということをぜひもう一度認識していただき、卒業した後、その人生を終えるまで、心理学は皆さん方の杖となり足となつて同行してくれらることを信じて学んでいただければと思います。ご静聴ありがとうございました。

(2008年11月29日 同志社大学心理学部開設記念シンポジウム「心育の時代」に向かって」基調講演を編集し掲載。大学寒梅館ハーディーホール)

略歴

千 宗室(せん そうしつ)氏
1956年生まれ。同志社大学文学部卒業。2002年12月、裏千家第16代家元となり今日庵庵主として宗室を襲名。著書に「自分を生きてみる」など。

中止になった入学式と 大谷實先生の思い出

ただ今ご紹介に与りました「犯罪者」の佐藤優です。正確に言うともまだ確定はしていませんが、99・9%ぐらい犯罪者の世界に足を掛けています。ただ、あまりそのこと自体は気にしていません。我が校祖の新島襄先生は国禁を犯して外国へ出たわけです。当時の法体系からしますと、あれは、ばれたら確実に死刑でした。そもそもイエス・キリストというのが犯罪人で、死刑になったわけです。開き直って言っているわけではなく、これは同志社精神というものを考える時に、何を規準にするかということで重要になってくるものだと思うんです。

私が栄光館に来るのは約30年ぶりです。その間、ここへ来たのは入学式一回だけです。神学部は私の時は40人ちょっとで、入学式は法学部の人たちと一緒にしました。式の案内があり話があり、大谷学長がこの壇にまさに立った瞬間、後ろの扉がババツと開くんです。60人からの赤いヘルメットと覆面をした学生たちがわーっと入ってきて、「おう、大谷。ようやく捕まえることができた。移転につ

レクチャー

インテリジェンスと同志社精神



佐藤 優

いてはどうなっているんだ」と、ごろを巻くわけですね。東大紛争は1969年に終わっています。本で読んだ、あるいは映画で見た学園紛争の世界が1979年の時点で、目の前で展開されたわけです。事務の人が「中止！中止！入学式、中止！」と叫んで、「後は各自、学部に戻って指示に従ってください」。それが私の入学式でした。

あの時の学生たちに、大谷学長（大谷實大学名誉教授）が「何やってるんだ、機動隊を入れる」と言ったら、全員逮捕です。みんなの運命が変わってしまった。しかし移転問題など、大学をどうするかというのを当時の学生たちも真面目に考えているという認識を、大谷先生は持っていたわけです。ですから、それと違う時代になると、今度は機動隊が入って実際に逮捕されたりと、いろんなことがありました。

当時封切られた映画があります。加藤剛さんが出演する「衝動殺人 息子よ」という作品です。加藤剛が演じている、人権を大事にする、しかも非常に優れた私立大学の刑法学者のモデルが大谷先生だったんです。ですからその映画を見る中で、ああおれたち何やつちゃったんだ

ろうなど、当時の学生たちは皆考えていたわけですね。同志社大学とは、こういうところでした。

インテリジェンスとは 行間を読む能力である

インテリジェンスという言葉は最近よく聞くようになりました。今までインテリジェンスというのは、スパイであるとか、あるいは情報ということになると、よく分からない。もともと「情報」という言葉が結構新しい言葉です。明治時代に入ってからのもので、「敵情報告」という言葉を詰めて「情報」にした。敵の様子を見るところという指向性があるから、インテリジェンスは関係があるんです。「intelligence」は、「intel」間に「」という言葉を合わせて、「組み立てている間のもの」を指します。ラテン語というのは普通、一人称単数の主格で言いますので「ego」になります。ラテン語とギリシア語というのはあれこれ行き来していますからね。オックスフォードのでかいラテン語の辞典では「ego」と引くと、一番最後には「読む」という意味もあります。これはギリシア語の「lego」が入ってきたから

と思うんですが、「行間を読む」という意味も決してずれていないので、私はインテリジェンスというのは「行間を読む能力」だと見ています。

「intellectual」という英語は人間にしか使いません。それに対して「intelligence」は、「あの猫は逃げ足が速い」と言う時には「あの猫にはインテリジェンスがある」というふうに使うわけですね。ですから動物でも人間でも、国家でも、それが生き残っていくための能力ということなんです。

陸軍中野学校の「誠心」と 同志社の「良心」

このインテリジェンスを世界で一番最初に本格的な形で受け止めて、インテリジェンスの専門家をつくったのは、実は日本です。ハルビンの特務機関長をしていた秋草俊という人が作った、陸軍中野学校なんです。その時には「後方勤務員養成所」と言いました。1930年代に入るまで、日本の情報は特務機関方式というやり方でしていました。情報に長けている人に対して、今で言う30億円とか40億円とかのお金を渡して、自由な形で工作させた。それでだいたいうまく行

っていたんですが、1930年代になって、日本がソ連に送り込んだスパイが全部摘発されるんです。どうしてかと言うと、スターリンが秘密警察を大変に強化して合同内務人民委員部というのを作り、都市住民全員にパスポートを持たせるんです。切符を買うにも住宅を借りるにもパスポート。それから労働証書というのを持たせて、職場を移ることに全部その労働証書に書かないと、職場を移れない。ですから、スパイが潜入する余地がほとんどなくなりました。

そこで秋草俊は、まったく新しい情報学校を作ろうと考えたんです。その時の基礎にしたのが実は、キリスト教のミッシン、宣教団です。キリスト教の宣教団には本質的にスパイの役割があるということに、陸軍中野学校を作った人たちは気付いたんです。現地の人と結婚する、語学を徹底的に覚えることなどを中心にして、相手の内在的論理というのを掴まえることを基本にした。その時に陸軍中野学校は「謀略は誠心によって行う」と、「誠」ということを中心に据えたんです。

しかも第1期生、第2期生に、陸軍士官学校や陸軍大学校を出た人間は一人もいません。東京帝大、京都帝大、東京外

事専門学校、今の東京外国語大学ですね。早稲田、慶應、拓殖大学。こういうところが中心でした。なぜか。最初から軍人になりたいと思って来ている連中は考え方の幅が狭い。戦前における軍隊は大変なエリート養成機関でしたから、数年間軍隊にいて、その後、箔を付けて民間企業でキャリアを積みみたい、伸びたいという人たちがうまく情報戦士にしようと考えたわけです。ちなみに同志社からは一人もいません。キリスト教的な考え方というのは、ぎりぎりのところで国家のために汚い仕事をする時にぶつかるんじゃないかということを秋草俊は心配したんです。この心配はある意味で正しいと思います。

陸軍中野学校でこういう話がありました。秋草俊が歩いている時、「天皇」という言葉が出たので学生たちが直立不動の姿勢を取った。すると秋草俊が「馬鹿者」と言って怒鳴りつけた。「そんなことではどんな潜入をしても、すぐに軍人だとばれる。それより、おまえたちの考えは腐りきっている。天皇だって人間だ。そこから考えないと情報工作なんかできないぞ」と。軍服は着るな、丸坊主にしなないで長髪にしておけ、天皇を絶

対視するなという教育をしていたんですね。「八紘一宇」などというのも禁句だと。八紘一宇という言葉で中国人を説得できるのか。じゃ、今まずおれを説得してみろと。

結局、工作活動というのは、自分が絶対に正しいと信じ、相手も絶対に正しいと信じ、それでいいと信じたところでしかできない。それが「謀略の心は誠である」ということです。

ですから、例えば日露戦争の時に明石元二郎が、フィンランド人に対して決起を呼びかける、あるいはロシアの中のユダヤ人との連携を強化して帝政ロシアを日露戦争の時に壊そうとするのは、帝政ロシアの反ユダヤ主義や、フィンランド人に対する抑圧からその人たちを解放するというのは大義名分があるし、フィンランド人、ユダヤ人のためになる。そして日本の国益になる。こういう連立方程式を組んだ時だけ、初めて工作ができると考えたんです。ですから陸軍中野学校は、中国工作はほとんどやっていません。理屈が見つからなかったからです。その代わりインドネシアをオランダから解放するという作戦は積極的に展開する。その時、陸軍中野学校で一番重視したのは

誠心であると、こういうわけでした。私は外務省で仕事をしていましたが、いわゆる偏差値という順番からすれば、当時は、やはり東大や一橋などと比べると、同志社はちよつと一列くらい下のところにいたと思います。早稲田や慶應の人たちとは、ほぼ互角だったと思いますけれど。ただ神学部ということを考えるならば、当時はいわゆる受験戦争の外側にいました。ところが私は東京大学教養学部の専門課程で教官をやっていましたし、モスクワ国立大学でも教えていました。外務省の周りにいるのは東大卒、京大卒の人たちの方がずっと多い。しかし仕事における能力や語学の能力で、彼らと比べて引け目を感じたことは一度もないのです。現代の論壇でもそんなことを感じたことは、まったくないので。

最近同志社の若い人たちに会ってちょっと心配なのは、偏差値であるとか、この就職先に何人行ったとか公務員試験の合格者が何人とかいったことを、異常に気にしすぎるということです。そんなつまらないことを気にしている暇があるんだつたら、自分で本を読んで勉強すればいい。知識をつければいい。それだけの、簡単な話なんです。

ただ、それでもつかない知識とか応用力というのがあります。それは、根本に掲げているところの、物の考え方の基本で、同志社人の場合はまさに「良心」というものを底に据えていった。このところが私は重要だと思っんです。キリスト教主義も自由主義も国際主義も、それはすべて「良心」という一つの言葉に収れんさせるようにした。この良心というのは、また別の形だったら、「誠心」などということも非常に近いと思うんです。これを勉強することができたのは、やはり私は神学部にしたからだと思います。

神学部's 'Other World'

神学部では3回生以降になると、だいたい神学部から出てきません。その中で自己充足している世界なんです。今だから明らかにできますが、神学館の2階の図書室の角に、とんでもない部屋がありました。我々はその部屋を「Other World」と呼んでいました。外側の壁も紺色に塗られて、真ん中に小さな黄色いすりガラスが入っているが、中はよく見えない。そこが神学部の学生運動の活動家たちと、そのシンパのたまり場でした。そこ

に我々は大学と大学院の6年間、ほとんど住んでいました。こんなものを大学がどうして残しているのかと思うていて、野本先生（野本真也大学名誉教授）がある時言ったんです。「秩序が成り立つためには、どこか秩序が完全に崩れている場所がないといけない」と。

私は何かのレトリックだったのかなと思いましたが、今になってこの話には神学的意味があったことがよく分かります。野本先生はそういう形で、ユダヤ教のカバラの話をしていたんです。ユダヤ教にはカバラ、直訳すると「伝統」と言いますが、カバラの知恵というのがあります。理屈の世界がこれだけ積み重なると、必ず、理屈に反する世界がそれと同じだけ積み重なって、ある時パーンと破裂してしまうという発想です。今回、金融工学などというものがぶつ壊れてリーマンブラザーズの危機が生じてくるなどというのも、カバラ的な見方をすれば簡単に分かるわけなんです。

ちなみに、神学はそういう意味では虚学なんです。神学部の人たちが一番仲が悪いのは文学部哲学科の人たちです。それは哲学と神学の間にずっとある近親憎悪なんです。我々神学をやっている者

からすると、哲学も文学も、みんなそれは実学なんです。神学と哲学というのは近いように見えますが、我々の方から見ると一番遠い学問なんです。まったく意味がなくて、まったくこの世の役に立たないのが神学の特徴です。と言うと神学部の先生に怒られるかもしれませんが、私はそれを確信しているんです。

論理的に正しい方が負ける神学

まず、論争というのが起きますね。論争が起きると、だいたい論理的に正しい方が勝ちます。ところが神学の場合は、だいたい論理的に正しい方が負けるんです。それで異端という烙印を押されることになる。ところが、これがちょうどいいんです。だいたい神学論争というのは最後は政治権力が入ってきて暴力的になって、力で押さえつけるという感じになるから、勝った方は、ちよつとやましいところがある。理論的にはこっちの方がまずいんじゃないかなという気持ちがあるんですね。負けた方は、政治的には弱いし人数は少ないけれども、自分たちが絶対正しいと思う。その両方の人たちがいるから、キリスト教の中でのバランスが保たれているんです。役人に

なる人にとつても、神学の教育というのは一番役に立ちますよ。まず最初に結論を決めるんです。そして後は、そこに向けた議論を組み立てていくんですね。これは官僚の理屈の組み立て方と同じです。

例えば、神学で「フィリオクエ」という議論があります。フィリオクエは「子どもからも」という意味です。ニカイア・コンスタンティノポリス信条に、聖霊はどこから出てくるかという些末な議論があるんです。本来のテキストには「聖霊は父から発出し」と出ています。ところが、西側のカトリック教会では「父および子から発出し」とある。その「子からも」というのが、ラテン語で「フィリオクエ」です。

1054年にそれが原因で東西教会が分裂します。東の教会というのは当時のビザンツの教会。その系譜を引くのがロシア正教です。これに対して西側のカトリック教会は、もともとニカイア・コンスタンティノポリス信条に「子からも」というのが入っているが、それを正教会が削除した、とんでもないことをしたと言つて因縁をつけた。しかしその当時は本当にそうだと思つていたんですね。と

ころが16世紀ぐらいになつて文献学が進んで調べてみると、どうもこっちの方が後から付け加えたんじゃないかというところが、はつきりしてきます。しかしそういう時も、こつちが間違つているとか絶対に謝つたりしない。テキストには書かれてないけれども、より正確にするためにやっただという形で頑張るんです。ですから現在でもこのフィリオクエの論争になると、結論は先に決まつているんです。そこに向けてどうやって議論を作つていくかということなんです。

例えば1951年のサンフランシスコ平和条約2条c項で、日本は南樺太と千島列島を放棄しています。その当時、吉田全権は、千島列島の中には国後・択捉のある南千島が入るということを言っています。国会答弁で当時の西村熊雄条約局長は、日本は、南千島すなわち国後・択捉を放棄しているということを明確に言っているんですね。ところが日ソ国交回復を進める時に、これは日本側の公式な記録には残っていませんが、当時の日本の全権代表だった松本俊一という人がダレスの統括ということを言っているんです。アレン・ダレス國務長官が、もし歯舞群島、色丹島の2島返還で日本が手

を打つてソ連と平和条約を作るならば、我々は沖縄の施政権を永久に返還しないと云つたと。それだから困つちやつたんですね。それで国後・択捉を復活したというのが、歴史実証的にはそうなんです。しかし実際の外交の現場では、そんな過去の経緯など知つたことかと。我々の固有の領土の北方四島というのは、固有の領土だから固有の領土だ。これはトートロジー、同義反復といえます。トートロジーというのは絶対に崩れない。論理で一番強いのは同義反復です。絶対に当たる天気予報を申しあげましょう。「明日の天気は、晴れか晴れ以外のいずれかです」この天気予報は絶対にはずれません。ただし、天気に関する情報がまったくない。

今、皆さんは笑い事のように思っているでしょう。でもヨーロッパやアメリカの間は、この同義反復、トートロジーというのを聞くとき背筋が寒くなるんです。何かの凄いやつと、ところが我が日本国の内閣総理大臣が、イラクにおいて非戦闘地域とは何ですかと問われた時、「非戦闘地域とは自衛隊が派遣されている地域です」と答えた。じゃあ自衛隊が派遣さ

れている地域とは何ですかと問われると、「それは非戦闘地域です」と答えた。この小泉さんの理屈は絶対に崩れないんです。少し難しく言うと、恒真命題。要するに論理関数の中に、命題関数の中にいかなる数値を入れても、常に真である値が出てくる。これ、同義反復なんです。神学をやると、この同義反復の力が非常につくわけですね。これが神学の一つ目の特徴です。論理的に正しい方が負ける傾向が強いということです。

2番目は、議論が積み重ね方式にならないということです。普通何か議論する時は、それは既に決まつたことですから、その上で積み重ねていきましようということをやりますが、神学の議論というのは、議論をしているうちに政治が絡んできて暴力的な対立になるとか、あるいは議論がどんどん些末なところへ行くんですね。例えば去年柏書房から、東大の池上俊一先生が監修をして『針の上で天使は何人踊れるか』という、とてもいい本が出た。これは中世の普遍論争が最後に行き詰まつたところで、針の先で果たして天使は何人踊れるのかという、大論争を展開するわけですね。その論争を展開してみんなくたくなつて、その話に

ついては忘れてしまふんです。忘れてしまつて2、300年経つと、同じ話がまた蒸し返されてくる。同じ話を何度も反復するというのが神学の特徴で、まったくの徒勞みたいなことをやっているんですね。

神学とは何をする学問なのか

私が学生時代から一番関心を持っていたのは、神はなぜ人となつたのかという受肉論です。これについては1700年前くらいからいろんな議論があるんですが、些末な議論もある。全部読んでいたらおそろく、3、400年くらいかかる。かなりの資料が神学部にありますから、私が残りの人生をすべて尽くしても絶対にこの問題を解決することはできないというだけでは分かります。しかし、そういうことに取り組むのが神学者の仕事です。

それによつて何が分かるか。人間の思考の底の、底のところにある、何かを掴むことができるんですね。この感覚は野本先生に教えられたのと、もう一つは、小動物を大切にしないかということによつて教えられました。野本先生はもともとあまり猫には関心がなかったけれど、

ある日息子さんが猫を拾つてきた。捨ててきなさいと言つたら、「猫を捨てるんだつたら僕を捨てろ」と息子さんが言つた。それで猫と住むようになったら、先生と奥様が犬の猫好きになつちやつた。野本先生は「猫は人間の考えていることを結構分かる」とおつしやつていました。猫を触わっていると何となく着想が湧いてくると。これと同じことを、ロシア革命を成功させたレーニンが言っています。レーニンは子どもや動物と遊ぶのが好きだった。革命とか何かで行き詰まつた状況になると、犬や猫のお腹を撫でていた。そうすると突然、着想が湧いてくるわけですね。

私なりに解釈すると、猫や犬は未来を予測することができない。特に、死に対する恐れがない。我々はどこかで死に対する恐れというのがあるんですね。結局、宗教の根源というのは、我々は救済されたいというところにあるんです。我々には死がある。しかし死ということを確認できない、考えないでおく。そこから生じてくる不安を隠している。猫や犬にはこの不安がないんです。たぶん野本先生はそういうことをおつしやろうとしたと思います。そういうことに触れるのが神学の

仕事なんですね。

ヨーロッパは、はつきりしています。総合大学、university、universityと言う場合には、必ず神学部がないといけない。これはカトリシズム、プロテスタンティズムの伝統のところですね。正教の世界では神学校というのは世俗学問とは最初から分かれていきますから、モスクワ大学にはもともと神学部がないんです。ちなみに東ドイツにおいても神学部はありません。例えば、もともと神学では非常に有名なライプツィヒ大学というのがありますが、これは東ドイツになってから「カール・マルクス大学」に名前が変わりました。ですから私は神学部で資料を見てびびりしたんですが、「カール・マルクス大学プロテスタント神学部」と書いてあるんですね。これはシュールレアリスムの世界みたいだなあと。マルクスは宗教を阿片と言ったじゃないかと。しかしそこでやはり、いい研究をしているわけなんです。

神学の面白さというのは、一回取り憑かれると離れられなくなってしまうわけです。ですから私も、外交官になってからも神学書はいつも手元に置いておきましてし、聖書はいつも読んでいるという

その時に私の武器として使った話というのは、神学の話だったんです。日本人だったら、神学といっても神道をやってるんじゃないかと言われる。いや、神道学じゃなくてプロテスタント神学だと答えると、日本にもプロテスタント教徒がいるのかと。どれぐらいだと聞かれて、公称で50万だと答えた。キリスト教徒は公称で100万だけど、いつも教会に行っている人はたぶん20万人を切ると思うと。そしたら向こうの連中は腰を抜かしたわけですね。ソ連でも、バプテスト教徒だけでも500万人はいると。

ソ連時代、モスクワには一つだけプロテスタント教会がありました。「全ソビエト・バプテスト・福音主義キリスト教同盟」といいます。同じところに「全ソ・セプンズデー・アドヴェンチスト教会」というのもあった。非正教、非カトリックは全部一緒だということで、一つの教会に全部詰めているわけですね。それで、土曜日はセプンズデー・アドヴェンチスト教会の人たちが礼拝をして、日曜と水曜はプロテスタントの人たちが使っていた。10時と3時と夜の7時に分けて、ちょうどこの栄光館くらの大きさのところで立錫の余地もないくらい

生活はずっと続いています。それは、今やっている仕事とダイレクトにはつながらないがゆえに、神学の強さというのがあるのだというふうに考えるわけです。

濃密な時間を過ごした モスクワ留学時代

私は1987年から88年、モスクワ国立大学の言語学部に留学しました。当時ソ連にはロシア語が下手になるための特別のコースというのがあったんです。レニンのは、資本主義国の外交官は皆スパイだと言ったんです。だから、ロシア語がうまくなくて情報収集活動を一生懸命やられたら困る、ロシアに人脈を作られたら困るというので、ロシア語が下手になってロシア人が大嫌いになる特別のコースを作っていたんです。

当時のモスクワ大学にはいろんな不思議な学科がありました。例えば経済学部は、資本主義経済学科と社会主義経済学科に分かれていました。資本主義経済学科というのはマルクス経済学です。資本主義体制というものは、マルクスが『資本論』で予言したとおり矛盾によって崩壊するということを研究する学科です。ここはあまり人気がない。これに対して

者が集まって、みんなでお祈りをする。ただ、プロテスタントというのは、知的な水準はあまり高くなって、いにしえから教えられている自分たちの伝統を維持している集団という感じで、ある意味では手付かずの状態があったんです。

そういう環境の中で私は勉強していて、驚いたんです。本当に生き死にの原理として、無神論という枠組みの中で、そのテキストの中から、キリスト教の真髄とは何なんだということを読み取っていくとするわけですね。その時に私は、ドストエフスキーなどもロシア人のインテリたちと議論して読みました。彼らは『カラマーゾフの兄弟』や『罪と罰』において書かれている神の像、キリストというのを、非常に懐疑的に見るんです。神とかキリストとか救いとかいう言葉が過剰であると。過剰であるということは、信じていないことだとロシア人は考えるのです。ドストエフスキーは本質において革命家だったんじゃないか、キリスト教の救済を信じたかどうか、そのところは分からない、などという話をみんなでするわけです。

私がその時にロシア人たちから一番聞かれたのは、日本人であってキリスト教

社会主義経済学科は近代経済学です。社会主義経済建設のために、ブルジョア経済学、近代経済学の成果を弁証法的に利用する。やっていることは全部、近代経済学なんです。だからソ連が崩壊した後、すぐに新しい資本主義体制に転換することができた。社会主義経済学の専門家は全員、近代経済学を勉強していたからです。同じように哲学部には、デリダとかフーコーとかハーバーマスとかを一生懸命読んで勉強しているような連中が、現代ブルジョア哲学批判学科というところにいました。

そういう中で「科学的無神論学科」というのがありました。私はその扉を叩いて行っただけです。半分の人間が先生の信者、半分がマックス・ウェーバーのような立場で社会的な立場から宗教現象を分析する。そして学生の9割が信者でした。こういう二重構造の場所だったんです。そこへ私が飛び込んでいったことによって、一つのケミストリーが出来て、そこから学生たち、大学の先生たちを通じてネットワークが広がっていった、それがその後、エリツィン大統領の側近であるとか、そういった人たちと繋がっていくようになったわけです。

徒であるというのはどういうことだということでした。特に、プロテスタント教徒であるというのはどういうことだと。例えば、日本の宗教でロシア人が一番シンパシーを持つのは神道です。どうしてか。ロシア人の感覚からすると、正教というのは宗教というよりも、ユーラシア地域にある人々の習慣なんです。ですからイスラム教徒は子どもが生まれると、洗礼を授けてくれと言って、よくロシア正教の教会に来ます。洗礼を授けた方が、子どもが元気になると思っているわけですね。ロシア正教の神父は結構簡単に洗礼を授けてしまいます。教会の行事にもムスリムが結構来たりします。全然そういったことに抵抗はない。

ですから日本の戦前の国家神道に対して、ロシア人、特にロシア正教の連中は関心を持ちますし、勉強したがるんです。ああいうのが一番いいんじゃないかと。完全に慣習にまでなつて、宗教だという意識がなくなっている。それが本物の宗教だと言う。私は、いや、そうじゃない、啓示というのは徹底的に上からの勧誘で、個人の回心が大切なんだと言うんですが、いや、それは西側のキリスト教の理解だと彼らは言う。神が人になったの

は、人が神になるためだったと。下から上にあがっていく道というのはあるんだと言うわけですね。

「悪」の問題は 旧約聖書に立ち返らないと 理解できない

それから悪の実在についての議論というの、しょっちゅうしました。実は、イエス・キリストは悪魔の人質になったと。人質になったからその身代金を払って帰してもらったとか、神学的なメタファーはいろいろあるんだけど、いろんな議論があるんです。例えば、悪というのは果たしてあるのかどうか。もし悪が本当にあるならば、その悪を創ったのは誰なんだと。神が悪を創ったということならば、これは神じゃなくて悪魔じゃないのかという議論があるんですね。神学や哲学の方で言うところの弁神論とか神義論の問題。この問題もまだ、解決が着いていません。

西側の教会、欧米が比較的陥りやすいのは、悪というのは善の欠如にすぎないという考え方です。そうすると、悪の実在というのが弱くなってしまうんです。それに対してロシアの連中というのは、

悪は悪として、それで実在している。善の欠如なんていうものじゃないんだと言う。地上に「悪い政府」などというものがあるれば、それはむしろ自然の現象だと考えるんです。人間は墮落しているから、この世の秩序が悪ければ悪いほど人間的だと考えるわけですね。ですからロシアの人は選挙では、我々の代表を選び出していくという発想がほとんどないんですよ。選挙というのは上の方から、悪いやつと、うんと悪いやつと、とんでもないやつが候補で来ると。そのうち、悪いやつを消極的に選択するのが選挙だと。そうでない、うんと悪いやつと、とんでもないやつが権力を握る。こういう感覚で見るわけです。

なぜ彼らはそういう発想をするのかと考えるうち、私は神学部時代、旧約聖書の勉強をもっときちんとやればよかったと反省しました。指導教授だった緒方純雄先生（大学名誉教授）が、シュライエルマッハの『神学通論』で神学の基本を勉強した時に、旧約聖書は新約聖書によって完全に克服されているとあつた。ところが私が神学部時代に影響を受けたチエコの神学者フロマーは、預言者に返れとか旧約に足を置かないとキリスト

神学部時代に影響を受けた 魚木忠一先生

そしてさらに遡及して考えるわけですね。なぜ私はそういう考えに至り、また、見えないものが見えるというような感じになってきたのかと言うと、これは同志社の神学部の時に受けていた教育だと。それは、先生たちから直接受けた教育や学生時代の仲間という話して受けた刺激もありますが、同志社の中に流れている伝統であり、それはテキストなんです。

何人もの優れた先輩や先生たちがいますが、ここで一人だけ挙げたいと思います。魚木忠一先生です。これは20世紀の日本の最大の神学者と言ってもいいと思います。それぐらいの立派な業績を残している人です。書いてある本の数は少ないです。そのうち重要なのは、1940年に書いた『日本基督教の精神的伝統』という本です。純粋なキリスト教というものは存在しない、キリスト教というものは典型的に理解するしかない。イエスが現れた時の、あのパレスチナには、パレスチナ類型というキリスト教があつた。そしてその後にはギリシア類型のキ

教の指針は分からないんだということ、を、さんざん言っている。ロシアに行つて、ソ連の崩壊を見て1993年のモスクワの内乱を見て、私はあのとき旧約聖書をきちんとやっておけばよかったと思うと同時に、旧約関係の資料を取り寄せて、ヘブライ語を含めてもう一回勉強しました。どうしてか。これはやはり、悪の問題なんです。そして、その後イスラエルとの関係も深くなったんですが、ユダヤ教などの勉強を一生懸命にするようになりました。

そこで私が今一番関心を持っているのはおそらく、神様が外部にいて、外部からこの世界を創ったと考えるのは、何らかの大きな誤解があつたんじゃないかということなんです。満ち満ちている空間の中から、あるとき神様は気紛れを起こして収縮した。そしてその外側に、収縮した残りのところに空虚な領域が出来た。そこが、たぶん我々が生きているこの世界だと思ふんです。そこが出来たことに対して、神様は責任がない。そこにおいては、われわれ人間と人間の関係性から本物の悪が生まれてくるんです。

このような考え方をすることになったのは現役の外交官のころからで、199

リスト教、さらにラテン類型のキリスト教、ゲルマン類型のキリスト教、アングロサクソン類型のキリスト教、それからスラブ類型のキリスト教があつた。キリスト教の本質とそれぞれの文化がふれ合うことによって、触発が起きると。「触発」ということをキーワードとしてキリスト教を理解しようとした先生です。

そして日本においては、日本類型のキリスト教が必要であると。日本的キリスト教ではだめで、「日本キリスト教」にならないといけないと言ったんです。そのためには儒教、仏教、神道の伝統の中でキリスト教はどう受容されたかということを理解しないといけない。戦後、あたかも魚木先生が時局迎合したとか、あるいは一種のシンクレティズム、宗教混淆みたいな言説だったという論断がなされたんですが、それはテキストを読んでもない。あのテキストの中にあるものではない。あの時の京都学派を超え、ゼーベルクあるいはトレルチを含めた、非常に高いレベルのものがあつた。それを時代状況の中できちんと発信していったということなんです。

だから私は、岩波の「世界」にも書けば「週刊金曜日」にも書く、あるいは新

左翼系の「情況」にも書くわけです。右の方でしたら「WILL」にも書いていますし「正論」にも書いています。「諸君！」にも連載が載っています。しかし私の中のインテグリティというのは、まったく崩れてないわけです。それは、私の考えていることというのは基本的に、神がそのひとりごをこの世に送ってきた、それが我々の救済の根拠なんだというのを、いろんな言語を使っているんな論理で説明するという、非常に単純なことをやっているわけなんです。それが、政治やイデオロギーで目が曇ってしまった人には見えなくなっている。その見えなくなっている状況を変えていくためには、曇っている、見えなくなっているところの、その言語でスタートするしかないんです。左側の論理で行き詰まっていることがある場合には、左側の言語でないと、それを崩すことができない。右側の言論の行き詰まりは、右側の言論で、その論理に乗っかっていくことで崩すしかないんです。おそらくは、イエスが2000年前に現れて、やろうとしていたことも、こういうことではないのかなと思うわけです。ですから、あの時にイエス・キリストという者が現れ

て、三十数年の生涯において、神とイエスがどういふような関係を持って、他の人間とどういふ関係を持ったという、この関係からアナロジーしていくという、関係の類比というのを考えているんですね。ちよつと神学的な細かい話になりましたが、神学部というトポスというのは、それができる場所だったんです。

幅広い学生を受け入れた 同志社大学神学部

私の1年先輩に大山修司さん（82年大学神学部卒、86年大学神学研究科修了）という、今は日本キリスト教団膳所教会の牧師をしている人がいます。それから米岡敬司さん（82年大学神学部卒）、いま千葉の自民党の県会議員をしている滝田敏幸さん（82年大学神学部卒）。この人たちは神学部の自治会の活動家でした。みんなでさんざん酒を飲んだ後Other Worldに戻ってくると、大山君が「今日こそ決行したいことがある」と言う。そして白いペンキを持ってきて、神学部の自治会の黒旗の上に魚の絵を描くんです。イエスがペトロに「人をとる漁師にする」と言ったことで、十字架がシンボルになる前には、魚というのはキリ

スト教徒、キリスト教会のシンボルでした。そして魚の腹にギリシア語で「クリストス」と書いた。それで大山君が言うには「これでおれたちの思いというものと、やっていることが近づいたと思う」。要するに当時神学部の神学生たちは、キリスト教というのはイデオロギーだから抜け出さないといけないと考えていた。しかし離れていくとするとキリスト教というのは付いてくる。また逆に掴まえるように思うと、今度はどんどん離れていく。ただ、我々にとつてキリスト教は大切だから、やっぱりシンボリックな旗に魚の絵を描いておいた方がいいんじゃないかと。

あの時僕らには、何らかのケミストリー、変化が生じたんです。そして洗礼を受けたやつもいるし、受けないやつもいる。しかし神についてキリスト教について、そして人間が何か考えてすべてできるわけではない、人間の限界について超越性について真面目に考えよう。こういうふうになったわけなんです。

大山君は、もとはフアンダメンタルなキリスト教の教団から来た人です。彼は学部を卒業した後、通信講座を受けて小学校の教員免許を取って教育実習もし

た。学校の先生になるのかなと思ってたら、ある時「最近、教会に通い始めている」と言う。牧師になりたい。もう一回キリスト教のことをきちんと考えたいと思う。これは決して逃げていないか就職のモラトリアムとかじゃないと思う、おれ自身やはり救われたいと思うんだ。それをちゃんと伝えていかなきゃいけないと思うと言ったんです。私は彼にこう言われました。外務省に行くのをやめて、もう一回神学部の大学院なりに残って神学の勉強をきちんとしないかと。それでもの凄い鋭い神学を組み立ててほしいんだ。ただ、はっきり言うておくけど、おれは佐藤にはついていけないと言う。私はその時、もの凄い衝撃というかショックを受けたんですね。

佐藤の考え方というのは、やっぱり天国には神様の書いたノートがあり、そこで選ばれた人というのは名前が書いてあると。佐藤、おまえ、本当に自分が選ばれているかと思っているかと。私は「分かんらん」と。しかし、選ばれたと思うことにしていると。そして、どんなことがあったって、それは神からの試験だと思つたと。彼は、そういう組み立てをすると、絶対に自分が選ばれていない側に入つて

いると思えてならないと言ってますね。だからバルトであるとかカルヴァンというのはどうしても肌合わない、やっぱりルターやウェスレーといったものを読むと、なんか魂が震えるんだよねと言う。私はこう答えました。僕自身も、僕が本当に選ばれているかどうか分からない。しかし、人間の回心とか人間の努力で自分が救われるという方向に向かうという回路は、一見謙虚なように見えて、神の救済の業を逆に過小評価することになる。人間的なものをそこに持ち込むのは人間の傲慢だと思うんだ。この話は平行線のままになるんですね。

結局、私自身が感じるということのは、同志社の伝統の中にある、このカルヴァン派のような考えをしている私のような人間も、ウェスレー的な考えをしている大山君のような人間も、ありとあらゆる考えの人が神学部の中にいることができたという、その幅だと思えます。私の場合はもともとの母体が、カルヴァン派の日本キリスト教会というところでした。

いま思うんですね。人間というのは誰も、子どものころ一番最初に触れた世界観的な思想、あるいは人生で一番最初に

触れた世界観的な思想の刷り込みから抜け出すことはできないと。私の場合は結局それがカルヴァン的なキリスト教だったんです。ですからある意味では、さつき「犯罪者です」と言つて、それは反省してないというのを言いましたが、それは日本国家や世論との関係においてのことで、神との関係においては反省しているわけです。どうしてこういうことになったのかと。しかしそれと同時に、なぜ神は私にこういった試練を与えるのかと考える。だから、どんな逆境や厳しい状況に行つても、絶対に諦めないんです。それはある意味では意志が強い、根性が強いように見えるんですが、裏返すと、絶対に根元的なところで反省をしない、とんでもないやつということはあると思うんですね。これはカルヴァン派的なキリスト教の持っているところの、一番の弱点です。

僕はカルヴァンは嫌いなんです。バルトも嫌いです。フロマートカに惹かれるのは、フロマートカの中にはルターやウェスレーにつながるような部分があるからです。バルトのように、すばつと割り切れないところがある。だからもの凄く惹かれるんですが、惹かれたままで、ま

だ整理していない。ですから、こういった形で今、私は自分の中で神学的な作業を、もう一度残りの人生の中でやってみたいと思っているわけです。そして徐々にそういった作業をしています。早稲田大学の大学院でインテリジェンス論とジャーナリズムの関係について教えて、政経学部でも同じようなことを教えています。拓殖大学では日本精神論の講義をやってくれと言われました。これは基本的にお手伝いしようかなと思っていますが、そのベースにあるのは、やっぱり私が同志社の神学部で勉強したことなんです。そこところから私は、全然ぶれていないつもりでいるわけです。

「国家」と「貨幣」

最後に、現下の日本の国家と社会の関係について言いたいと思います。2007年NHKブックスから『国家論 日本社会をどう強化するか』という本を出して、私の大枠の考え方はそこに書いていますが、ちょっとマルクスの話をします。マルクスの『資本論』はぜひ読んでおいていただきたい本です。『資本論』には社会主義革命の必然性などということはどこにも書いていない。資本主義が強い

んだということが分かります。同志社神学部の先輩である高畠素之がこの全訳をしました。彼が『資本論』を訳しているうちに、完璧にマルクス主義者ではなくなったんです。彼が訳した『資本論』は戦後訳されている『資本論』よりも、ずっと正確で読みやすい。この高畠素之の系譜で私は思考しているわけです。

マルクスの資本論の論理によると、労働力商品化というのは力ギです。労働力は本来商品ではないけれども商品になっている。労働力というのは、1カ月、労働者が家を借りて服を着て、食べ物を買ってレジャーをして、残り1カ月働いていく力が出てくるために消費する商品の総量に等しいというのが、マルクスの賃金論の考え方です。それ以上に、労働というものは価値をつくり出す。しかし資本家というのは、その価値をすべて自分の手にすることはできない。土地の上に工場を建てていますから、地代という形でお金を地主に払わないといけない。ここで言う地代には、土地の豊饒力であるとか、そういったものが入っていますので、現在で言うところの環境、自然です。つまり資本によっても労働によっても環境はつくれないという、環境制約性というこ

とをマルクスは『資本論』の中で明確に言っているんです。

ただ、ここで考えてほしいんです。マルクスの資本論の世界では税金の話は一切出てこないんです。マルクスの資本論の構成は、イギリスの古典派経済学を大成したデイビッド・リカルドの「経済学および課税の論理」から出ています。この半分は課税の話です。マルクスはこの社会の構造全体を分析するので、まず第一段階目としては、国家をカッコの中に入れて排除した。そして社会の理論としてだけ『資本論』を書いた。そこではあたかも資本主義は永遠に続くかのようなモデルで書きました。

ではそれに国家というものを併せて書いた場合、どうなるのか。国家というのは抽象的な存在ではないです。そこには官僚がいます。官僚というのはどういう人たちか。昔、「臣民」という言葉をよく使いました。臣とは国家から給料をもらっている人、公務員です。民はそうではない人、税金によって生きている人たちです。税金は取らないと、誰も払いたがらない。しかし払わないと、捕まえる。脱税は検察庁の特捜部が逮捕します。脱税は国事犯なんです。一人の官僚

が生きるために、仮に500万円必要とします。もしその500万円を収奪するということならば、国民からブーイングが起きますね。ですから2000万円取って、1500万円を教育、福祉、あるいは国防で再分配する。そして、あたかも再分配するという中立的機能を果たしていると装って、官僚は社会から収奪する。こういう存在です。それが国家の本質です。国家の本質は暴力であるということ。レーニンもマックス・ウェーバーも言いましたが、それは正しいんです。それでは、そういう国家はなくていいのか。「国家」がなくて「社会」だけで我々は生きていけるのかと言ったら、それはそうではない。国家というのは、他の国家との関係において存在するからです。仮に日本に国家がなくなつて社会だけの存在になるとしたら、すぐ周辺にある国家が日本社会を征服してしまいます。そして、収奪していく。ですから他の国家との関係において、国家というものは、やはり社会を含めた国民全体を守るんです。この弁証法的な構造を理解しておくことが非常に重要だと思えます。結論から言うと、国家とは是非非で付き合えということなんです。

この国家と同じように危険なのは貨幣です。貨幣は商品を交換していく中の便宜から出てきた、特殊な商品です。ところが、商品がいつも貨幣に換わるというわけではないが、貨幣を持っていれば商品に換わる。すると、欲望が何でも実現できると。人間と人間の間から貨幣は生まれているにもかかわらず、そこには大変な力があるんだという物神性がついてしまう。国家と貨幣は、我々が一番気をつけて付き合わないといけないものなんです。なぜなら、神様のように見えてしまうから。そこに絶大な力があるように見えてしまうから。

我々キリスト教徒はそのところにおいて、貨幣経済というものを回避することとはできない。貨幣という基準に自己を同一化することもできない。国家から完全に離れて中立になることもできない、しかし国家を絶対化することもできない。そういう意味において、大きなシチエナリカレーナリを作るということだ。我々は塩の役割を果たすわけですね。我々自身はその中において、常にイエス・キリストに帰らなければいけないと思っているわけです。

私は一番面白いと思うのは、エルサレ

ムの神殿におけるイエス・キリストのやり取りです。エルサレムの神殿で、パリサイ派をはじめとする、イエスに反対する連中がイエスを引っ掛けてやろうと思つて質問します。「税金を払うべきでしょうか、払わないべきでしょうか」と。「税金を払うべきだ」と言ったら、こいつはローマ帝国に従えと言っているぞという形で攻撃する。「税金を払うな」と言ったら、今度はローマ帝国に対して、帝国に反逆していることを訴えられる。

こういう引っ掛け質問に対しては真面目に答えたいけないと、イエスは考えます。大変な知恵を働かすわけです。そして、1デナリオン銀貨を持ってきた。さういふ言葉が刻まれています。さういふことは、この銀貨を持ってきたやつは、エルサレムの神殿に異教の神様を持ってきたから、その瞬間にアウトです。そこでまず引っ掛けていくわけですね。おまえは質問を発する権利がないと。その上で、誰の顔が描いてあると尋ねた。銀貨にはカエサル（カエサル）の顔が描いてあります。イエスは「カエサルのはカエサルに、神のは神に」と言つた。税金を払えと言っているように解釈できると同時に、そう

いう国家権力には従うなど言っているような解釈もできる。そういう的確な言葉をあのコンテクストの中で、敵の前で見つけることができるという、これがイエスの凄さなんです。

日本社会の強化に必要なこと

ですから今、日本の国を本当に強くしていくため、我々の社会を強くしていくため、それは同時に戦争に我々が巻き込まれない、戦争を引き起こさないということも非常に関係しています。そのためには、社会を強化することなんです。

田母神俊雄さん（元自衛隊航空幕僚長）の論文で本当に問題になっていることは実は、クーデターに対する予感ですね。厚生省の元の事務次官夫妻が殺された時も、政治目的か何か明白でないにもかかわらず、すべての新聞、テレビが「年金テロだ」と書いたじゃないですか。その背景にあるのはテロに対する期待感ですよ。社会というのが弱くなっている。その状況で、政治が国民の見解を反映していない、経済の調子も悪い。こういう時は、どの国でもテロリズムという回路によって物事を解決しようという動きが来てくる。テロリズムやクーデターが

起きると、暴力によって物事を変えようとする動きが出て、その次の瞬間に、国家が暴力を使い、テロやクーデターを封じ込める。一番大きな暴力装置を持っているのは国家です。国家が暴力によって社会全体を覆えるような状況が来るわけです。

それに対して異議を申し立てるようにできるのが、教養の力であるし、それによって結びついた人々のネットワークであって、社会の力だと私は思うんです。そういう具体的な状況の中において、私はキリスト教というのは今こそ——キリスト教徒の人数はたとえ少なくとも、あるいはキリスト教徒になるという必要はまったくないです。自分が本当にキリスト教で救済された、イエス・キリストが救済の根拠だと腹の底から思わないかぎり、キリスト教徒になってはいけません——しかし、キリスト教徒的な物の考え方が具体的に表れている同志社の「良心」といって、この教育のところから、何か見出せるものがあると思うんですね。具体的な提言はできないんだけど、さっき言った、関係の類比という考え方で聖書を紐解いてみて、イエスというもののリアリティーを考える。彼が考えていた

愛というのがどういうものなのか、それを自分の言葉で翻訳し直す。これが私は、今の社会と国家を強化するために重要ではないかと、こんなことを考えております。

（2008年12月2日、「第13回同志社国際主義教育講演会」での講演を編集し掲載。栄光館フアウラーチャペル）

略歴

佐藤 優（さとう・まさる）氏

1960年、東京都生まれ。同志社大学神学部卒業、同志社大学院神学研究科修了。在ロシア日本国大使館、外務省国際情報局に勤務するかたわら、モスクワ国立大学客員講師、東京大学非常勤講師を務めた。2002年に鈴木宗男衆議院議員をめぐる事件で逮捕、起訴され、現在上告中。主な著書に『国家の畏 外務省のラスプーチンと呼ばれて』（新潮社・2005年、新潮文庫・2007年）、『獄中記』（岩波書店・2005年）、『自壊する帝国』（新潮社・2006年、新潮文庫・2008年）、『私のマルクス』（文藝春秋・2007年）、『国家と神とマルクス』（角川文庫・2008年）。